

■小川琢治 地質学者。卓抜な識見と不擁の精進で、内外から注目され、学界を常にリード。湯川秀樹ら子も皆優れた学者に。

おがわたくじ

初の日刊新聞1870＝ 紀伊国田辺で、儒者浅井篤の次男に生まれる。

明治6年政変 1873＝ 3歳：

佐賀の乱・・・1874＝ 4歳：一家で和歌山に移住した後、

父の私塾の転遷に従い、紀ノ川沿いの村に住み、学制制定後ながら小学校に通わず、父から漢学を学び、

琉球処分・・・1879＝ 9歳：

明治14年政変1881＝11歳：

新体詩抄・・・1882＝12歳：父が有田郡広村の学校{耐久社}に招かれると、その書庫に出入りして、多くの漢籍に親しむ。

岩倉具視没・・・1883＝13歳：県立和歌山中学校に入学、

司馬光「資治通鑑」を読むなどしていたが、

帝国大学始・・・1886＝16歳：中退して、上京。

国民之友始・・・1887＝17歳：第一高等中学校に入学、

初の対等条約1888＝18歳：

帝国憲法発布1889＝19歳：小川家を継ぐ。

足尾鉍毒始・・・1891＝21歳：御殿場で静養している時、同校の内田銀蔵を知る。健康回復を目的に休学後、濃尾地震が起こり、被災地を見て、帰省し、熊野旅行を敢行。自然や人文をつぶさに観察して地学の研究を志向するようになり、

大本教・・・1892＝22歳：復学、

郡司千島探検1893＝23歳：卒業し、帝国大学理科大学地質学科に入学。

日清戦争始・・・1894＝14歳：

日清戦争終・・・1895＝15歳：東京地学協会から、日本が領有することになった台湾の地誌の編集を委嘱され、

白馬会・・・1896＝26歳：*「台湾諸島誌」刊行、好評で、当協会の元評議員だった福澤諭吉から晩餐会に招かれ、賞賛される。卒業し、大学院に進むも、

八幡製鉄始・・・1897＝27歳：退学し、農商務省技手として地質調査所に勤務、{地学雑誌}の編集主任も務め始める。

政党内閣初・・・1898＝28歳：技師に昇格。日本各地の地質調査に従い、西南日本の地質図・説明書を作成し、

Bushidou・・・1899＝29歳：*ナウマンと原田豊吉の所説を批判した「日本群島地質構造論」「西南日本地質構造論」を発表、

ピアノ国産化・・・1900＝30歳：パリ万博に日本地質図などを出品するため、フランスに出張し、第8回万国地質学会議にも出席、

田中正造直訴1901＝31歳：ヨーロッパの一流学者らと交流して、帰国。

教科書疑獄・・・1902＝32歳：中国各地を視察、

__E・ナウマンと原田豊吉など日本の近代科学の先輩地学者たちの学説にむかって、みずからのデータと乏しかった既存の内外資料とに基づいて多くの研究報告を公にし、学界の権威に屈することなく論争を挑む。その卓抜な識見と不擁の精進で早く一家をなし、世界の学界の注目をひき、貢献すること多大で、

日露戦争終・・・1905＝35歳：

満鉄発足・・・1906＝36歳：「西南日本の地質構造概観」「日本群島は褶曲山嶽に非ざるか」、

韓国反日暴動1907＝37歳：国際地質学会議に「日本群島の地体構造について」を発表。この年まで{地学雑誌}の編集主任を務めた。

アヲホ創刊・・・1908＝38歳：京都帝国大学文学部に前年新設された地理学講座の教授となり、

伊藤博文暗殺1909＝39歳：理学博士となる。

まず、中国の歴史地理の分野を開拓、アラビアの天文地理の影響や、「山海経」の価値などを明らかにし、

明治天皇没・・・1912＝42歳：

大正政変・・・1913＝43歳：梓川で石を発見したヘットナーや山崎直方らと、わが国の氷河地形を確認して問題を提起するなど、

21ヶ条要求・・・1915＝45歳：

のちに人文地理学、精緻な数理地理学などを含む自然地理学、地質学、広義の地球物理学その他もろもろの境界領域をも包括する、きわめて広義の地学体系の発展・確立に先鞭をつけて行く。

原敬首相暗殺1921＝51歳：理学部へ転出し、地質鉱物学科主任教授となる。

関東大震災・・・1923＝53歳：関東大震災の後、学界での従来の「地震構造線」の概念を是正し、深発地震、日本島弧に並行する海溝などにも着目して、地殻の科学、ひいて、災害の科学への新生面を拓き、

護憲三派圧勝1924＝54歳：「地震と都市」。*{地球学団}を設立、機関誌{地球}を創刊し、多岐にわたって自説を展開しながら、後進の育成にも努め、

共産党事件・・・1928＝58歳：「人文地理学研究」、

世界恐慌・・・1929＝59歳：「地質現象の新解釈」、

海軍軍縮条約1930＝60歳：京都帝大を定年退官。直後から氷河地形の研究を再開したほか、実証的、文献的考証などに基づき、

満州事変・・・1931＝61歳：満州事変後は、戦争地理学に地政学の要素を含ませるようになるが、

国際連盟脱退1933＝63歳：

日中戦争始・・・1937＝67歳：

大政翼賛会・・・1940＝70歳：「支那歴史地理研究」(初集および続集)まで、*広範にわたる幾多の著作を相ついで発表し続けて、

日米開戦・・・1941＝71歳：没した。自伝「一地理学者之生涯」が刊行される。

没後、京都大学での講義の草稿をまとめ、卓見が随所に躍如とした「日本群島」が公刊された。長男小川芳樹(冶金学)、次男貝塚茂樹(東洋史)、三男湯川秀樹(素粒子理論)、四男小川環樹(中国文学)がある。